



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第一一五号(二日発行)
平成十一年四月一日

年表で読む 古平の歴史

《23》

■開校当時の浜中学校

古平での学校のはじまりは明治八年一月、真宗の寺院を教育所として行われ、これが現在の古平小学校の開校となつています。明治一〇年九月に浜中学校と改称しましたが、その後、児童数の増加によって明治一三年一〇月、新校舎が完成しましたが、そのころの在籍数などは下の表のようです。

明治一五年の古平の人口は三八三七人と記録にあります。が、就学率はかなり低くて、特に女子の低いのが表からわかります。さて平成一一年、古平の人口は約四、七〇〇人ですが、古平小学校の三年生までの児童数は九四人しかおりません。

明治年	教員	生徒			前年と比較		書籍数
		男	女	計	増	減	
9	2	52	14	66			43
10	2	60	18	78	22	—	243
11	2	91	12	103	25	—	247
12	3	106	18	124	21	—	247
13	2	104	23	127	3	—	277
14	6	142	25	167	40	—	277
15	6	142	25	167	—	—	277

*明治一六年の浜中小学校の就学率は五六%でしたが、出席率は九九%でした。

■浜中学校の財政

明治一三年に浜中学校は、郡内からの寄付によってモダンな新校舎が完成し、校名も浜中学校と改称しました。

また、その前年の明治一二年に、民家を借り受けて沖学校が開校しましたが、明治一五年の児童数は三八名でした。

古平小学校の経費は、鯉漁で景気よかった郡内からの寄付と、就学している児童の親からの集金が予定通りあったので、財政的にも問題なく、年々その教育内容も充実していききました。(下の表は開拓使事務報告書から作成)

■学校教育に関する話題

浜中学校が開校し

明治年	収入				
	繰越	寄付	集金	利子	計
12	0	2,871.000	516.000	0	3,387.000
13	2,871.800	0	838.350	0	3,710.150
14	3,070.040	0	1,630.795	24.762	4,725.597
15	3,068.285	0	0	0	3,068.285

支出				
教員給料	諸給料	営繕	雑費	計
230.500	65.500	0	215.200	515.200
216.803	111.588	0	311.713	640.104
468.852	256.113	619.051	312.496	1,656.512
60.000	70.000	0	55.784	189.784

て二年後の明治八年、札幌農学校が開校しました。また、今、何かと話題になっている君が代は、明治一四年、文部省で編集した小学唱歌集に載りました。が、儀式などで歌うことを定めたのは同三年のことです。

大正五年

4/14 今日もまた大漁、入

舟町から歌棄山中まで一帯の
鯨、入舟町から前浜まで*1一
杵ぐらいづつ獲れた、刺網も
大々漁、*2西村歩方前の浜五
六間のところで*3ケラ掛か
り、こんなことは何十年来な
い珍しいことで、狂気せんば
かりの喜びようだ、今日の合
計五千石、△では大漁手ぬぐ
いが出た、刺網*4一放で*5一
本半は掛かっている、二年分
は獲ったことになる、入舟町
の刺網も大漁、なぎはよし、
天気はよし、実に見事だ

4/15 連日の大漁だった、

今日は鯨は切れたが建網も刺
網も*6沖揚げに忙しい、刺網
の大漁ぶりは老人でも経験が
ないという、刺網一放で一本
半として、一万五千放では二
万二千五百本、約九千石だ、
総計で*7二万五千石になる、
近辺では第一等の漁である

4/17 入舟町岬から前浜、

歌棄山中一帯が鯨漁で厚い、

△、④など一杵宛て、刺

網は今日もまた大漁、本日五
千石、海も陸も大漁旗、大漁
手ぬぐいで大景気である

4/18 七日以来の鯨漁実に

珍しい、昨夜は少々、今日は
どこも*8鯨つぶし、町はネコ
の手も借りたほどの忙しさ
だ、

4/19 昨夜は鯨漁なし、陸

では鯨つぶし、鯨さきで一生
懸命だ、天気が良いので町の
人も大喜びだ

高野名幸作さんの日記から



【16】

4/21 鯨漁はないが陸は賑

やかで、鯨つぶし、鯨さきで
まるで戦争のようだ、余市や
山方面から、毎日出面取りが
二百人から三百人入っている
というが、それでも手が足り
ない

4/22 群衆・歌棄山中方面

で二、三杯獲れた、沢江方面
では鯨つぶし、*9釜たきで忙
しい、歌棄方面は大々漁だっ

たので刺網も釜たきしている
4/25 鯨漁あちこちで二、
三杯獲れる、利尻・礼文方面
で獲れるようになったという
から、鯨漁もそろそろ終漁か
も知れぬ

4/26 自転車で行く
たが、道路は良いのだが、鯨
を干しているの走りにくい
だ、タラ・カレ釣りに出る者
もたくさんいる

4/29 鯨漁も終わったよう

だ、タラ・カレ釣りに出る者
もたくさんいる

4/30 刺網も仕事が一段落

したようで、余市から来てい
る出面も明日あたりから帰る
ようだ、大漁祝いで餅をつく
ところがたくさんある

文中の用語

*1 一杵（ひとわく） 船に吊
り下げた袋網に、鯨がほぼ満杯
になると一杵として数え、二〇
〇（三〇〇）石入るといふ。

*2 歩方（ぶかた） 大正時代
の歩方の多くは、働く人が給料

を決めないで労力を提供し、必
要経費を差し引いた残りを親方
とある割合で分け、それを働い
た人たちで人数割りする。

*3 ケラ掛かり 刺網の網目い
っぱい掛かった状態、大々漁

*4 一放（ひとばなし） 刺網
五把を一放といい、大正時代は
保津（ホツ）船一隻で四〇放か
ら五〇放を積んでいた。

*5 一本（いっぽん） むしろ

で梱包した単位で、年代や製品
で重量は違うが、大正時代は、
身欠きだと一〇〇本を一把とし
て二四把（二四〇本）をむしろに
包んだものを建一本といってい
たが、後に一六貫（六〇き）に
なる、千数の子・しめ粕などは
二四貫（九〇き）で建一本。

*6 沖揚げ 汲み船が杵船に行
き、杵網から鯨を汲みあげて陸
岸まで運び、もっこで廊下など
へ運び入れるまでの作業。

*7 石（こく） 鯨の場合、身
欠き四〇貫（一五〇kg）を製造
できる鯨の重さで、その四倍の
一六〇貫（七五〇kg）を一石

*8 鯨つぶし ほんとうに鯨を
（次ページ下段へ続く）

遙かなる故郷の思い出 わが闘病生活

[54]

③

橘 義 春

私も、これから先がいささか不安になってきた。この日から酒は五勺に再節酒、ご飯は茶碗んに半分、おかずは少なめにした。気になるのはやはり血糖値だった。治る薬が無いというので、半分はヤケ気味だった。

指定された日に診療所に行き、検査を受けたら先生から赤い手帳を渡された。見たら、なんとそれは糖尿病患者手帳だった。

中に書かれていることは、『この手帳の所持者は糖尿病患者である。もし倒れているのを発見した人は、すぐに甘いものをなめさせてください。』とある。情けない———なんでも俺が糖尿病なんかになるんだと、わが身を恨んでみたこともあった。

私の家内の友人で、糖尿病の合併症で目が見えなくなり、さらに最後には手足の指の血流が悪くなり、ついに壊疽(えき)となり、指がぼろぼろに腐って亡くなった人がいる。

また、私の知人の元警察官で、糖尿病で苦しんでいる人もいる。重症で視力は最悪の状態、体調も悪く、力になってやりたいがただただ見ているだけ、という気の毒な人もいる。

私も、糖尿病でこのようになるんでねえべが……と、考えるとうつすら寒くなってきた。

ところがなんと、捨てる神あれば助ける神ありで、世の中は案外捨てたものでもない。

診療所から家に帰って来て、居間のテレビのスイッチを入れたところ、それは糖尿病に関する番組だった。どこの局だった

かいま記憶にないが、ある医師が、娘さんに遺言を残して亡くなった。ところがその遺言状には、もし糖尿病で困っている人がいたら、酢卵を飲むように教えてあげなさい、と書かれていて、その遺言状を持って来て見せてくれました。

(このテレビは、確か五年ぐらいい前に放映されたもので、古平町の皆さんの中にも、ご覧になった方がおられるのではないかと思います)

医師は科学者であり、患者に勧めるからには数多くの臨床試験をして、効果のほどは確認してのことだろう。医師の書いたものであり、信憑(しんぴよう)性がありとつさに判断し、私は、すぐメモ用紙に書き込んだ。

その酢卵というのは、米酢一合(安物はだめ)の中に、きれいに洗った卵を殻のまま入れ、一週間ほどそのままにしておいてから、箸のようなもので殻を突き破るが、殻はほとんど解けているので、中の薄皮をていねいに取り去る。それから箸でぐるぐるとかき混ぜるだけ。これ

(前ページより続く)
つぶしてしまった人がいたという笑い話があるが、親指で鰾の腹をさいて、数の子や白子などを取り出す作業のこと。

*9 釜たき(釜炊き) Ⅱ 生鰾を鰾釜と呼ばれる大きな釜で煮て、それをしめ胴という鉄製の枠でしめ、水分や油分を抜き、しめ粕を玉台という台の上のせるまでの作業をいうが、その作業に当たる人を一般に釜たきといっている。

~~~~~

を大ぶりの盃で、毎日一杯ずつ飲むというのである。飲み始めたら、すぐに次の酢卵を作っておかなければならない。酢卵だから飲みにくい、これで糖尿病から解放されると思えばどうってことはない。

私は飲み方を工夫してみた。盃一杯の酢卵をぐいっと口の中に放り込むと、すかさずコップ半分ほどの水を口に流し込む。この方法でやってみたが、意外と楽に飲むことができた。

—— つづく ——



# 北海道に新天地を求めて 生涯をかけた鯨漁

〔下〕

田 岸 倉 治

利尻の八木漁場に仕込みをしたが、漁が良くて借金は返済され、今にして思えば、利尻などへ行かなかったことがかえって良かったのではないかと思っています。

昭和四十一年（一九六六）発行の余市漁業発達史に、ローソク岩・尻場岬付近の鯨漁の隆盛ぶりが書かれています。田岸貞治の時代、沖町では鯨の陸揚げ場所が狭かったため、鯨の梓船を古英丸（丸ト）という蒸気船で、ローソク岩や沖町から入舟町の浜まで曳航し、かねて買収していた場所に陸揚げしていました。それほど明治末期は豊漁だったのです。五千坪ほどもあるこの場所は、田岸貞治出張漁場として明治年間、②高橋、③中村から譲り受けたものです。ところが、大正二年に台風による大時化があり、大波がその

番屋まで襲って来て被害を受けたことから、場所の海岸一帯に堅固な石垣を築くことになり、小樽から星川石屋、古平の石田、清水石屋の三人の石屋さん、その工事に当たりました。また、身欠きや数の子などの鯨製品を秋まで保管しておくため、四間に十数間という石倉も建てました。

大正年間には、鯨漁業も順調に漁がありました。昭和に入ると突然の不漁、凶漁が連続して襲ってきました。それでも昭和四年三月、私が、小樽中学校へ入学のため余市行き定期船を待っていた時のことです。丸山岬の種金・種田漁場で、ひっきりなしに網起こしをするのを見ていました。その苦勞している様子が今では夢のように思い出されます。

昭和四年といえ、すでに古

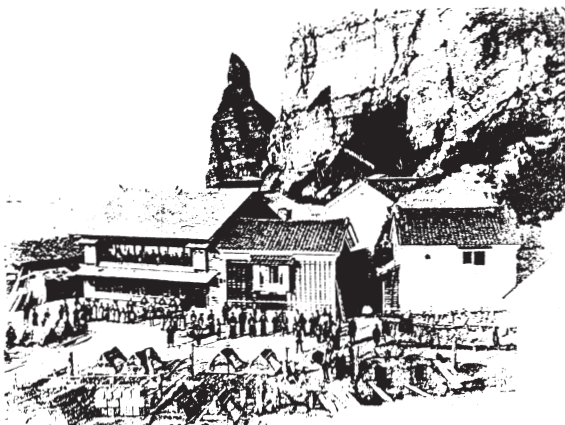
平では沖村・田岸漁場・沢江村△仲谷漁場・丸山下の多種田漁場・上磯から出張漁場の種田本家・群来村渡辺漁場などでは、蒸気機関によるウィンチ（巻上げ機）を、また、入船町④山口漁場では、ウィンチの原動機にモーターを利用していました。しかし、せっかくウィンチなどの機械化が進み、鯨場の作業の能率が上がってくると、皮肉にも鯨はこの沿岸から去って行ってしまいました。

そして昭和九年、多くの鯨漁業者が結束して、北海道鯨合同漁業株式会社設立された時に、田岸藤吉は海面も、陸上の施設などの大部分を会社に投資し大株主になりました。その後、鯨漁は全く衰退して、会社は昭和二十二年に解散をしてしまいました。

戦後になり、私は実家の田岸藤吉のもとに戻り鯨漁をしましたが、当時の湯内鉾山（今の豊浜町）からの鉾毒や建場の場所が悪く、それでも十年間に三度ほどの漁はあったものの、他の漁場に比べると漁獲量も少な

く、苦しい経営が続きました。それでもよく家計を守って来られたものだと、当手を振り返り自分ながら驚いております。

昭和三十年から現在の職に転職しましたが、バスに乗って海岸を走り海を眺めると、鯨の群来に沸いた当時のことが昨日のことのように思い出されます。セタカムイを背景に田岸貞治「漁場住宅（番屋）」と倉庫群（大正中期のころか）



— 終わり —

ふるさと  
歳時記

人の世の峠はるかに  
こき妻に捧げる

吉川 義雄

荒海の時雨つき抜け嫁の来る

当時の私は役場に勤めていたから、妻は当然、漁師のところに嫁に來たわけではなかった。

彼女もそう思つてやつて來たのだが、妻にしても、私にとつても、想像もしていなかった生活形態に方向が転じられてきた。

當時は、まだ大家族制度の色合いが濃く、さらに住宅事情も悪くて、嫁をもらつても、易々と別居する家なんか無かつた。

わが家も、二十坪の家に一間だけあつた二階は、一足先に結婚していた妹夫婦が占居していたし、新婚の私たちは同じ二階でも、屋根を支えていた柱を無謀と思えるほど取り払つて作つた、親父手造りの部屋であり、

風が吹けばキンで鳴つた。小学生の末弟一人を含む四人

の弟たちが、父母と下の二部屋を占拠し、総勢三所帯十人が、ひとつ屋根の下に住む仕儀になつていた。

私を除けば、全員が漁師とその家族であり、役場吏員として、いわば月給取りの妻になつたと思つていた彼女は、漁師の家の生活と、月給取りの妻とはさまで苦しみ始めていた。

しかし、彼女の決断は早かつた。敢然と、漁師の家の方に軸足を据えた。こうなると黙つて見ている妹ではなかつた。誰も文句なんか言つていないのに、「ねえさんのやることに文句があるかッ」

と、弟たちは勿論のこと、両親にも突つ張つて妻の庇護につとめた。

あえていうと、男ばかりの兄弟たちの中に生まれた、私のす

ぐ下のたつた一人の女性、キカなくならない訳はない。昨年、堀家の次男に嫁ぐまでは、吉川家を切り回していた、文字通りの大黒柱みたいな存在であつたのだ。

女たち畑荒して転げくる

まるで性格の違う女たち二人はよくウマが合つて、まるで姉妹みたいに仲が良く、妻は始めから漁師の妻みたいに恰好が身につきだしていた。

家族全員が妻を心から受け入れていた姿に、私のつまらぬ不満なんか出されるわけではないが、役場で開ける弁当の中に、魚の嫌いな私をオチョくるように、モイの塩焼きだけが鎮座していて、こんなはずではなかつたと、わびしくなつた。

昭和二十四年五月、古平の大火をはさんで、仕事もさることながら、私は同志会、青年会だと、漁師の家に背を向けるようにして自分を忙しくしていた。理想にしていた家庭の設計はあつさり崩れ落ち、大きく空

き始めた空洞を、何かで必死でうめようとしていたのかも知れない。

家の中では、誰かに当たるようなことはしなかつたが、外では、理不尽な目に合うと、誰彼かまわず真つ直ぐにぶつかつていったのも、この頃であつた。

町長も議長も例外にはならなかつた。結果として、私は役場をクビになり、何くそと、次の町議選に出て当選させてもらった。二十八歳になつていた。

群小蟹急ぎ横切る潮溜まり

役場を辞めてから、すぐに拾いあげていただいた漁業組合も辞めた私は、町議の任期四年間を、あれほど反発していた漁業にのめり込んでゆき、皮肉なことに、妻が先行していた道を追う結果になつた。

——つづく——



# 生きてゐる『いじりね』

## 渡辺 ハツエ

私がまだ元気で、自転車を乗り回していたころのこと。チラシ広告の〈強力ライト〉が目にとまりました。日ごろから、万一の災害に備えて用意しておきたいと思っていた矢先だったの

で、朝食の後片付けもそこそこのして自転車を走らせました。

この店は、二日間の日程出張販売に来ていて、今日はその初日でした。お目当ての、赤い色の強力ライトはすぐにあります。支払いを済ませて、

「これは、私でもセットできるでしょうか」と言うと、店員さんは笑いながら、

「説明書が入っているから、普通であればできるよ」

とのことでした。

「さて、私は普通だろうか？」と、ひとりで笑いながら帰って来た。

家に帰ると包みを開けるのもどかしく、説明書を読みながら組み立ててみたが、何回やっ

ても明かりはつかなかった。店へ持って行ってやってももう方が早いと思って、また自転車を走らせました。

お昼時なのか、店の方は混んでいなくて、さっきの店員さんがいたので、

「私は普通でないのか、何回やっても明かりがつかないのでお

昔なら、今ごろは鯀漁で浜は

大騒ぎをしている時期でしょうが、先ごろ、増毛方面で鯀が獲れたということがニュー

スになったぐらいで、この前浜での鯀漁は、昔話になってしまいました。

鯀が獲れてたところは、鯀を積んだ船が岸に着くと大勢のモッコしよいの

人たちが列になって、その鯀を廊下といわれる倉庫の

ようなところや、そこがいっぱいになると、地面に竹で編んだすだれを回したな

## まんぼう

### 竹内コト

願います」と言ったら、早速見てくれました。

「乾電池の入れ方が間違っていたよ」と、すぐ入れ直してくれました。

「聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥」を、実感して帰って来ました。

夜になって、納屋に用事があったのでライトの出番です。スイッチを入れたら、ライトは美しく鮮やかな明かりで足元を照らした。

ぼというところへ運びます。

そのとき漁場によつては、モッコで船から一回運ぶごとに、

まんぼう（ばんぼう）というようです」という割り箸のような棒をくれます。モッコしよ

うは、普通、一日とか半日で賃金をくれます

が、これは棒の数で、運んだ回数で賃金を払

うのです。こうゆうところは少なかつたよう

ですが、親方が出てやっていたところもあつたようです。

その後、寝てから深夜に目覚めたら、茶の間が何となく明るい。明かりがついてないのに不審に思つて行つてみると、それは片すみに置いたライトの明かりでした。スイッチはちゃんと切つてあるのに、そのライトは、私の思うのに欠陥商品だったのです。今度は、

『安物買いの銭（三）失い』を体験しました。

まったくもつて、欠陥ライトに振り回された一日でした。

また、大漁して陸揚げを急ぐときなどは、もっこしよいの人たちの口に飴玉をいれてくれたりすることもありました。

一日モッコしよいをすると、大人だと一回り大きいモッコで五く六杯買います。女の出面賃は男の半分が六割ぐらいでした

が、大漁のときなどは普段の三、四倍にもなることがあります。

まんぼうですが、これは鯀製品を出荷するときに、運んだ数を確かめるために使われる木札のことをいうようです。



# ふる里の温泉



石井 愛子

小高い丘の上に、小学校の分教場がありました。大正生まれの私の時代は、一年生から四年生までが男女共学で、それに、あのころはこの家も子どもが多くて、それは賑やかなものでした。

その分教場の跡地に、温泉が湧いたのです。今は過疎地になった古平は、もうむかしのようには鯉も獲れなくなり、また、豊浜トンネルの事故のこともあり、街は沈んでいくような寂しさでした。

むかしから汽車も通らず、若い人たちは働く場所もないので、みんな都会へと行ってしまっています。その古平に突如温泉が湧いたのです。温泉は、人の心も温めてくれます。

いまは週二回、役場の車が温泉への送迎をしてくれますので、一人暮らしの年寄りや、車

の無い家の老人は、どんなに无助かることでしょう。

温泉場に行くとは幼馴染みがいって、周りを見ても見覚えのある人ばかり、また、温泉で働いている方も親切で、優しくお世話をしてくれます。どっぷり故郷という感じがして、昔話に花を咲かせ、子どものころにかえったような気持ちになります。

また、この温泉は泉質が良くて温まると、小樽・札幌方面からも来てくれています。町外に出ている方も、実家に帰郷なさったらぜひこの温泉に入って、ふるさとのお湯を楽しんでみて下さい。

温泉場からの帰り道、街全体の景色が目の前に広がり、日本海とローソク岩も一枚の絵のようです。これからは若芽も萌え、木々もいつそうの美しさを増すことでしょう。

昨夜食べたカジカ汁は大変うまくいった。カジカの種類は極めて多い。ペロペロとうろこのない顔はチンクシャ？だが、とにかくおいしい魚である。

ちよつと漢字を調べてみたら、鰕・鮎・石斑魚・石伏魚など……。また、溪流に住むもの、海に住むものがあつて、種類も豊富なようである。

名称も花カジカ・カジカンボウ・オコゼ、賞味するのはトウベツカジカで、なべ（鍋）こわしともいわれる。時期にもよるが、カジカは♀（メス）がうまいらしい（テレビ

## なべこわし

福井 幸平

（で見た）。肝臓はアンコウと同じく、これまた美味である。歳時記では、魚に秋だからやはり九月らしい。古平では鍋物として冬の寒いときに食べ、鍋

がこわれるほどついついて食べるのでなべこわしというが、決して俗称ではなく正しい和名である、権威ある学者が言っているから間違ひではなさそうである。あつさりとしたみそ汁に限るが、ぶつ切りの豪放な北国の荒磯の料理である。

× × × × ×

古平に住んでよかりし鰕汁病みてより食に卑しき鰕汁何処ゆくも雛の飾れる家ばかり

渡辺 ハツエ

## 川柳

年金者大事に使う振興券お陰様すべてに感謝老いの日々

石井 愛子

年老いて平凡というありがたさ孫が来る婆もつくろい眉を引く黒沢さん気骨ただよう男の背

# 古平ホトギス会

熱燭や浪曲好きな夫も逝き 齊藤波留  
 茶話に三つ用意の桜餅 仲谷比呂子  
 雪祭り茶髪の歌手も真っ白に 仲谷安代  
 大寒や漁師泣かせの季節風 大和田絵伊  
 店頭のつらゝ落としや縄を張り 仲谷美砂  
 若水や昔ながらの汲み井あり 水見句丈  
 十年はたちしと思うスキー帽 福井幸平  
 街吹雪訪う人もかく暮れにけり 山口悦子  
 シリバ岬逆光にして初日の出 大島喜恵

## 古平町岬短歌会三月詠草

うぐひす餅もかたくなりしか春寒く仏前の桃の花色あせぬ 長崎フユ  
 水分たつぷりふくむ大根を掘りたてよと言ひ友置き行けり 竹内コト  
 荒磯に造成されし小公園古き観音さま海向きて在はす 池田テル  
 チューリップ畑の雪の深きまま弥生半ばをなごり雪舞ふ 鈴木時子  
 海明けに採り来しと若布いただきぬ身の入らねば冷凍にせよと 榊佳代  
 暖かき日差しとなりて囲ひより出でし一位の緑うるほふ 東美知

丸山の塙へ急ぐ冬鴉 山口浪  
 独居もいつしか慣れて雛飾る よしざきり  
 雛の間や暫くあかりともし置き 室谷弘子  
 正月の残りし餅を揚げもして 岩瀬みのる  
 恙なく還暦祝い豆撒けり 関口勝志  
 冬木立海に暗さを移しけり 越野清治  
 一人居の梅花の一枚開きけり 越野敏雄  
 風花の遊ぶ海原穏やかに 西島サツ子  
 東風吹けば鯨準備の今昔 外山俊久  
 担ぎ来て凍秋味をどさと呉れ 中村樺宵  
 山の上までたこあがつて行きにけり 小五・水見翔人  
 三人でもみじの森でぼうけんだ 小一・水見玲央

洋傘持たず出でしを悔いて吹き付くる雪に濡れたる眼鏡を外す 奥山きよみ  
 春の日に猫柳の芽ひらきしか切り通し辺に思ひをはせる 堀典子  
 柔らかき陽差しにとけし雪の壁ようやく隣家の灯りが見ゆる 田中香苗  
 綿入りケープを智子は作りて夜の冷えに肩痛みなげくわれにくれたり 菅原節子  
 たぎる湯に通せし若布青冴えて匂うばかりの春の色なり 山口スエ  
 スコップをさせばがさりと落ちる雪その感触を楽しみてをり 丹後初江